吸血鬼犯罪捜査官　美紅

城島剣騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
吸血鬼犯罪捜査官　美紅

【Ｎコード】
Ｎ１７４７ＢＡ

【作者名】
城島剣騎

【あらすじ】
近未来…
吸血鬼は世に認められ、人間と吸血鬼はともに手を組んで特殊刑事部隊を組織する。
おっちょこちょいな新米女刑事の主人公とクールなニヒリストが織りなす、はっちゃけ推理ラブコメ。

第一章<～プロローグ～>

「ちょっと待ちなさいよ！」
はぁはぁ。
ほんっとに！すばしっこいんだから。
「まさか俺が狙った女が実はおとり捜査をしている吸血鬼の刑事だったとはな。
俺もやきがまわったって事か…。
空中から見ると美形に思ったけどこうして見ると、案外ちんちくりんだな！」
るっっさい！
ちんちくりんで悪かったわね。
でもそんな事、あんたに言われるまでもなく相棒から散々言われてるのよ。
別にあんたに認めてもらわなくても、私はこれでも男性からの熱い支持層があるんだから。
「ククククク、警察の犬に成り下がった吸血鬼なんぞに俺を捕まえられると思ったか？」
容疑者である伊東　雅人は必死で追いすがる私を嘲笑うと、ヒラリと夜空を舞った。
くっそぅ、本当に憎らしい…。
悔しいんだけど私には奴のような飛行能力はない。
しかしせっかく見つけた容疑者を逃がす手はないので、私はパトカーに戻ってニヒリストの相棒と連絡を取ることにした。
「ごめん春樹。
せっかく容疑者らしき男を見つけたのに逃がしちゃった…。」
さぁて…。
どうせ最初に無線から聞こえてくるのは深い深い溜め息。

「はぁぁぁぁ。」
ほら、ね？
緊急時でなければ、ここから長い長いお叱りがあるんだけど。
「いいか！
奴の根城はすでに割れている。
だがな、今の奴は飢えていんだ！
今取り逃がしたら、絶対にまた被害者が生まれるんだ。
だいたいお前は…。」
プッ…。
まだまだ春樹の長いお説教が続くと踏んだ私は、思わず無線をぶっちしてしまった。
はぁ、そんな事は私だってわかってるっつーの！
私はあんたの知恵を借りたいだけなのに。
ともかく。
今は時間が惜しいので、この街の交通機関の要衝であるサンシャインブリッジを完全閉鎖する事を提案しようと、再び無線のスイッチをいれようとしていた。
吸血鬼にもいくつかの決まり事？
ルール？
ううん、いわば弱点ってやつかしら。
まぁ、そんなものがある。
容疑者の伊東　雅人は水に囲まれた埋め立て地などでは、橋を渡らないと目的の場所へ行けないっていう、変な弱点がある。
なので、橋さえ閉鎖してしまったら容疑者は他の場所へは逃れられずその場所から身動き出来ない。
で、春樹のお小言にうんざりしながらも無線を入れる…、予定だったのだけれど。
「くっそぉぉぉ！」
ほんの少しここから離れた場所から容疑者の悲鳴が聞こえてきた。
私って飛行能力はないんだけど耳だけは良いのよねぇ。

ついでに言うと走るスピードも本当はチーターなみなので、私は急いで悲鳴が聞こえた場所までフルスピードで向かった。
「あいたたた。
ちきしょう、またしても刑事だったのか！
しかも…、女装した男だとぉ？」
あっははははっ。
なんとも奇想天外な光景に私は思わず爆笑した。
だって…。
だってさぁ、あの無愛想でニヒリストの相棒が完璧なまでの美女に女装してるんだもの。
でも呑気に笑ってばかりもいられない。
癖っ毛で細めのこわぁい美女が私を睨んでいるんだもの。
「はぁぁぁ。」
きたよきたよぉ！
相棒名物のお小言ターイムっ！
…っと、とりあえず耳は塞いでおこう。
私の耳って吸血鬼だから特殊な動きが出来るの。
なんとっ！
耳たぶだけを動かして耳栓にする事が出来ちゃったりする。
はい、そこのサラリーマンの貴方。
便利でしょ？
ね、便利でしょぉ？
今、とっても羨ましいって思ったでしょぉ？
でもざぁんねん。
これって非売品なんだぁ。
って事であしからず。
「遅い！
何をやるにもするにもお前は遅いんだよ、このアホぅは！」
はいはい、お小言は署でゆっくりと聞いたげるから…。
って、ん？

なんかおかしいような？
…。
まっ、いっかぁ。
私って吸血鬼だから人生アバウティーなんだよねぇ。
え？
アバウトは吸血鬼とか関係ない、ですって？
まぁ！
そんな細かいつっこみしてたら、春樹みたいになっちゃうんだから。
とまぁ、私はくだらない事を口走って春樹のお小言をやり過ごした。
そろそろかな？
そろそろかしら？
私は恐る恐る塞いでいた耳を解放してみる。
「とにかく、だ。
早く容疑者の確保を行え！」
ほっ、お小言タイムはどうやら終わったみたい。
私は春樹に敬礼！などをやっておどけながら、春樹に押さえつけられている容疑者の手を取り、手錠をはめた。
「伊東　雅人。
婦女連続暴行、及び連続吸血殺人の第一級容疑者として逮捕します！」
なんだかんだ言って、やっぱ春樹って頼りになるよねぇ。
格好良いしね。
「美紅。
署に戻ったら話がある。
たぁぁ～っぷりな！」
わぁお、前言撤回（汗）
こうして私は相棒とともに容疑者をパトカーに連行し、署に身柄を移した。

第一章＜ＡＶＧＨ＞

西暦５５００年…
東京…

近代化が進み、車は運転手を必要としなくなった。
全てのエネルギーは宇宙光発電で賄えるようになった、近未来都市…

だが、いつの時代であろうと人が人として生き続ける限り争いの種は尽きず、今日もまたどこかで悪質な犯罪がまかり通っている。
ただ一つの違い…。
それは中世より闇から闇へと密かに生き続け、人類にとっての害悪に他ならなかった吸血鬼と、それを恐れ続けた人間が、医学の発展にともない人工血液を作るのに成功して以降、共存繁栄の道を歩んできたという事実だけではないだろうか。
しかしだからといって共存によって両者に安寧の時を迎えたという訳ではない。
吸血鬼の中には自らの悦楽によって人を襲う醜悪なる吸血鬼もいて、さらには闇ルートで人類の血を金に換える闇ブローカーなるマフィアが絡んだ事件にまで発展する始末…。

やがて事態を重く見た人類吸血鬼連合政府は、警察の組織の一つに吸血鬼専門の犯罪捜査を行うＡＶＧＨ［アンチ・ヴァンパイア・ガード・オブ・ザ・ヒューマン］、アブジーという組織を結成するに至ったのである。

結局あれから一晩中こっぴどく有り難いお小言を頂いた私は、終わった安堵感で大きな欠伸をした。

私の名前は上条　美紅。
実家は京都なんだけど、私はその潜在能力と実力？をかわれてアブジー結成のおりに東京に転勤とあいなった訳。
上条家は平安時代より続く名門の旧華族の家柄でもあり、御先祖様はかつて、あの有名な安倍晴明という陰陽師と死闘を繰り広げたという大妖怪の末裔らしい。
ま、ひらたく言えば日本発祥の和風吸血鬼一族の一つらしいの。
今はルーマニアやトランシルバニアが主体の吸血鬼世界連合に加盟しているんだけどね。
確かに世間一般に見れば、ドラキュラ伯爵とかカーミラ夫人とかのイメージといい、あちらが本家と言われれば反論しても詮無い事だしね。
とまぁ、私の自己紹介はこんなものでいいかしら？
あとは…、そうね。
私の家系は１６歳になった時点で歳が止まるって事と、本家と違って寿命があるって事ぐらい。
うちの家系で私が知る限り、最も長く生きた長老様［私の曽祖父様ね？］が２００歳だったから、それくらいは生きれるみたい。
だから永遠に生きれる本家の吸血鬼とは、だいぶ違うわよね。
でもね。
良い所だって、沢山あるのよ？
まず女として一番気になるのは結婚とか出産。
本家では基本的に人間と吸血鬼との結婚は御法度ってなってるの。
理由はまぁ、いろいろあるんだけどね。
まず第一には、種族の劇的な増加を防ぐ為。
愛する人には自分と同じように長く生きていて欲しい。
そういう気持ちって、人間も吸血鬼も関係ないって思うの。
まぁ私の所みたいに感染症のような力を持たない種族は例外として免除されてるけどね。
それと、本家の吸血鬼の女性は人間の男性とは子供をもうける事が

出来ない。
なんたって本家の人々ってアンデット…。
つまり一度人間として死んで、それから吸血鬼として第二の人生を歩んでいるから。
あんまり言いたくないけど、欧米の本家の女性の中には子供が生まれないのを良い事に、風俗に勤めたり娼婦なんかをやって生計をたてている人もいる…。
でもそういうのって嫌よねぇ。
あえて否定はしないけど、私なら人生を出来るだけまっとうに生きたいわ。
第一、好きでもない男性と…その…、あんな事や…こんな…事を…。
あんもう！わかるでしょ？
私だって花の独身女性なんだからぁ！
ごほんごほん、うん。
話を本題に戻すね？
吸血鬼世界連合って組織を紹介しとくね。
貴族と呼ばれる、一部の真祖［吸血鬼の元祖って言えば良いかしら］は私達種族と一緒で生まれながらの吸血鬼なの。
吸血鬼世界連合の中心は、その真祖が政治や経済の中枢を担っているの。
そして数年に一度、選挙とかもあって政治家も変わったりする。
まぁ人間の世界と違って党とかはないけど。
吸血鬼の属性を持つ者は、すべからく吸血鬼世界連合に加盟しないと人間達からその存在を認めてもらえないし、当然市民権を取得する事も出来ない。
で、吸血鬼って属性は世界中に様々あるんだけど、本家と違って人間との結婚を許される種族もかなりあるし、その趣向も弱点も違いも千差万別だったりする。
私達なんて燦々と降り注ぐ太陽もへっちゃら！
だって本家と違って生きてるんですもの。

寿命があるって以外に目立った弱点もないしね。
それに人間の男性と結ばれて出産だって出来るんだからぁ。
そういう人達は吸血鬼世界連合から祝福を受けて、ヴァンピールって称号を授かったりするのよ。
私だって今年で２０歳…。
社会人になったばかりでなんだけど、結婚だって知っておきたいから吸血鬼法律辞典を調べて勉強も沢山したの。
こういう知識も、言わばそのお陰だったりする。
ま、ざっとこんな所かしら。

第一章＜毒舌なる妖刀＞

東京…
警視庁刑事部にあるアブジー特務捜査課の一室…

「はぁ…。
しっかしなぁんでアブジーの私が交通課の要請で交通安全の巡回なんかに引っ張り出されなきゃなんないのよぉ。」
私はかなりぶぅたれていた。
何故なら、つい先日に凶悪犯罪者であった伊東　雅人の逮捕という大きな功績をおさめ、警視総監賞と非番を頂いたばかりだったのに…。
そう。
私は本来明日は非番だったのだ。
なのに春樹のやつが私に黙って交通課が最も忙しい今の時期に勝手に協力を願い出た為に、私の非番は明後日に延期されてしまった。
勿論、春樹も自分の非番を延期して通常勤務はするんだけど。
「フン。
ちょっとおとり捜査で功績をあげてテレビなんぞに出演させてもらったからって調子にのっていい気になりやがって。
そもそもあれは俺のアシスト…いや、実際に確保をしたのは俺なのだからな。」
むっかぁ～っ！
わかってますよぉ、だ。
私は思わず舌を出してべ～っ！をしてやった。
こいつ、藤田　春樹。
私が見た目で決めた人間ｓｉｄｅの刑事パートナーなんだけど…。
あ、アブジーの規則で捜査官は人間と吸血鬼で一対のパートナーを

組む規則になっている。
人間側からの要請で、吸血鬼だけに犯罪捜査を任せると見識が偏るから、とかなんとか。
まぁ、共存といってもこの辺りに私は温度差を感じずにはいられないのよねぇ。
で、私とパートナーになった藤田　春樹の話に戻るんだけど。

見た目は中性的で美少年雑誌ジュノンなんかの見出しを飾れるくらいのジャニ顔［ジャニーズ系の顔］だから、署でもその人気は凄く高い。
都内の女子高ではファンクラブなるものまであるらしい。
なのに容姿に相反して性格は可愛くない。
はっきり言って、歯に絹を着せない性格で思った事は言いたい放題！
時には重箱の隅をつつくようなマシンガントークもする。
でも悔しい事に彼の言論と論理、そして推理は理路整然としていて無理がなく、しかもそれが正鵠を射てるって感じなのよ、これが。
また、捜査にあたっての戦略や洞察力も半端じゃなく鋭い故に、彼はアブジーでも一目置かれる存在で毒舌なる妖刀という仇名まであるのよ。
でも言い方は本当に冷たいしクールというよりはニヒリストという言葉のが似合う。
見てなさいよぉ？
いつか必ず春樹より早く出世して、思いっきりこき使ってやるんだからぁ！
などと日々企んでいたりする。
だって、だってね？
私はキャリアだけど春樹ってばノンキャリアなのよ。
これは密かな私の優越感。
で、彼は東京の三鷹市にある天然理心流［あの有名な新撰組の主流派ね］って剣術の流派を学んでいるらしくって目録？［っても段や

級じゃないからわかんないけど」でかなりの凄腕らしく、さらには御先祖様をたどれば新撰組三番隊組長の斎藤　一っていう偉い幹部だったらしい。
まぁそんな変わった経歴もアブジー勤務の要因なのかもしれないけど。
天使のような美貌の容姿だけどクールでニヒルな春樹に、私は毎度毎度してやられている。
「ほら、ぼさっとするな。
とっとと給料分の仕事しろよ、このアホぅ！」
むっかむかぁ！
とまぁ今更腹を立てたって口で言い負かせる程に私はディベートが得意ではないので、黙って持ち場へ戻る事にした。
やがて今日の激務も終わり、警察署を出た私は毎度恒例の背伸びをした。
「はぁ～っ。
交通安全なんて私の範疇じゃないのになぁ…。
非番がなくなった訳じゃなくって延期になっただけなんだし、まぁいっかぁ。
春樹…。
私の顔を明日は見れないけど寂しい？」
と、悪戯っぽく私は春樹の顔色を窺い、ぺろっと舌を出して見せた。
でも私には彼が次に言う台詞くらいは読めたので、先に言ってやることにした。
「別に。」
「別に…。」
ほぅ～ら、ね？
春樹は興味の湧かない話や、どうでも良い事になると、別に。で済ます。
「春樹さぁ、もうちょっとリアクションの幅を広げて会話を膨らまそうとかないの？」

すると、春樹は大きな深呼吸をしたかと思った次の瞬間、私の髪の毛を引っ張りつつ耳元で怒鳴り声を張り上げた。
「こぉのドアホぅ！
お前のお陰で明日は始末書やらなんやらで雑務が山積しているんだ！」
キーン…。
春樹の怒鳴り声のせいで、危うく鼓膜が破れるとこだったじゃないのぉ。
「春樹ねぇ、私はこれでも署内で憧れのマドンナって言われてんだからね！
私みたいな可憐な乙女になんて野蛮な真似するのよぉ。
レディーに対してもっと優しく出来ない訳？
だから春樹は軽薄なファン以外の女性から敬遠されるんだわ。」
言ってやった。
が、予想に反して春樹はクックックッと可愛くない笑みを浮かべた。
「そんなに聞きたいのか？
俺の女性関係を。」
うっ…。
そんな魅力的な流し目をしないでよ。
思わずドキッとしちゃったじゃないの、春樹のくせに…。
「べっつにぃ？」
「べっつに？」
うぅっ。
こういう大人気ない仕返しがまた悔しい。

第一章＜短気な王子様＞

だから私は黙って帰宅途中にある自動販売機に１００円玉を入れ、缶ジュース…。
じゃない人工血液缶のプルを引っ張って、プシュッ！と開けた。
ゴクッ。
あぁうまい！
私は思わずプハ～っ！と漏らすと、、春樹は呆れ顔で冷たく言った。
「おやじか。
だから太るんだよ、お前。」
カッチーン！
あったまきたぁ。
「しっつれいね！
私は吸血鬼なんだから血液の取り過ぎで太ったりなんかしないわよ。
人間と一緒にしないでくれない？」
すると、春樹はさらに頭に血が登るような発言をして、私の顔を真っ赤にさせた。
「そうだよな、お前はやっぱり人間と違って化け物なんだよな。
すっかり忘れてたよ。
おまけにバカだし。
なぁ。
吸血鬼が皆、お前みたいなおバカばっかなら世界はとっくに滅びてるよな。」
怒り心頭に達した私は、そこから一切口も聞かないまま、リモコンでタクシーを呼びつけて帰宅する事にした。
明後日…

当然と言うべきか、私は朝を放棄して昼寝に突入し、ふて寝を決め込んでいた。
だってさぁ。
私ってば仮にも吸血鬼な訳じゃない？
まぁ本家の吸血鬼の方々と違って、私は例え夏のように照りつける日中の太陽の下でも普通に活動出来たりするんだけど。
因みに本家では夜にしか活動出来ない為、２４時間制の会社に勤務しているか［コンビニとかね］、自由に出勤時間が設定出来る仕事、タイムフレックス制の会社で仕事をしたりしているの。
そんな訳で、私の家系では寿命がある代わりに優遇されてる面もあるのかな？
でも日中と夜とでは、やっぱ夜の方が力が湧いてくるし、本領発揮も出来るのよ。
という事で非番の時はニトリで購入した簡易型棺桶ベッドで快眠を貪っていた。
しかしそんな私のささやかな休養は、いきなり容赦なく鳴り響く一本の電話で破られた！
当然、叩き起こされた寝起きの私としては不愉快極まりない。
「もしもし？」
と私は極めてそっけなく粗暴な電話の対応をした。
私の睡眠の邪魔をする奴なんて、決まって実家からか春樹あたりと相場は決まっているからだ。
「とっとと起きろ！
一人で起きられないなら、今からお前のマンションまで王子様の目覚めの往復ビンタで叩き起こしに行ってやろうか？」
ほら、ね？
やっぱり春樹だった。
それにしても他に言いようがないのかしら。
多分、春樹だけは絶世の美女が相手でも私と同じ対応をするんだろうなぁ。

だからイケメンなのに春樹の性格を知ったら皆、敬遠するのよ。
しかも春樹は冗談を言わない性質なので、本当にやりそうで怖い。
どうせなら、その甘いマスクに似合う起こし方をしてくれたらどんなにか…。
ない！
絶対にない！
あの春樹に限っては絶対にない！
まぁ嘆いたってそれが春樹なんだからしょうがない。
「王子様なら、そんな物騒な起こし方なんてしないわよ？
優しく抱き起こして甘ぁいキスが王道でしょ？」
と私が言うと、春樹は予想通り溜め息と同時に深い深呼吸をはじめた。
さて、受話器を今のうちに離しておかないと、えらい目にあうのよね。
と警戒したのだが、帰ってきた言葉は私の予想外の言葉だった。
「だったら優しくお姫様だっこで抱き起こしてやろうか？」
きゃ～っ！
なんて魅惑的な誘惑かしらって胸をときめかせて油断した瞬間、次の言葉はやっぱり春樹だった。
「こぉぉのドアホぅ！
グダグダ言ってないでとっとと来い！
殺すぞ、アホぅが！！」
はぁ～っ。
春樹は間違いなく一生涯独身確定ね。
と言いながらも私は矢継ぎ早に着替えを済ませて署に向かった。
署に到着すると、春樹は待ち構えていたように居丈高に腕を組んで不機嫌な顔をしていた。
「遅い！
刑事舐めてんのかお前は。

説明は後でするから、とっととパトカーに乗れ！」
車上の人となった私と春樹を乗せた無人パトカーは、ゆっくりと走りはじめた。
まったく。
到着早々これよ？
こっちは非番だってのに本当に労いの言葉すらないんだから…。
とぶぅたれていると、エスパー春樹は即座に私の心の声を読み取ったのか、黙って私の頭に軽い拳骨を入れてきた。
「今から向かうのはファイバー製薬の社長宅だ。
社長は一週間前からストーカー被害を受けているらしい。
しかも…、空からな。」
成る程、だから私達アブジーにお呼びがかかったって事ね。
「で、殺されかけたり誘拐されかかったりって実際に被害を受けた経歴は？」
というと、春樹はぶっきらぼうに報告書類を私の胸の前に差し出した。
つまりこれから先は自分で目を通せって言いたい訳なのね？
まったく…。
春樹はもう少し親切にするって事を学ぶべきだわ。
と本人に言っても１００倍くらいに跳ね返ってきそうなので、言わないけどね。
「どうやらストーキングされているだけで実害はないみたいね。
でも事件性がないなら、私達の出番なんてないんじゃない？
特に憂慮すべき事態とも思えないんだけど？」
私は事件性もないのに非番の所を呼び出されたの？という忸怩たる思いもあった為、殊更拗ねた物言いで春樹につっかかった。

第一章＜洋館への招待＞

「おおかた警察署内のお偉方と社長の間に、なんらかの繋がり［コネクションというより賄賂？］があったりって事じゃないのか？
社長曰く、親愛なるアブジーの皆さまへ。
日頃はアブジーの皆さまの活躍によって市民は安寧を迎えられております。
いきなり本題を申しますと、わたくしは最近、空からのストーカーなる被害に悩まされております。
ついては日頃、お忙しい激務をこなされているアブジーの皆さま。
わたくしをガードするお仕事を依頼させて頂きます。
あまりある勤務時間を有用にお使い下さいませ。
無事解決致しました暁には、またお礼に伺いたいと思っています。
だと！
っていうか、俺に絡んでくんな！」
まったく。
こういうのを慇懃無礼っていうのかしら？
だいたいお礼を致しますじゃなくって伺いますでも、言いたい事は一緒でしょうが！
春樹も普段は饒舌なんだから、こういう時に役に立って欲しいものよね。
と、私は春樹にちらっと横目で視線を投げかけた。
しかし春樹の攻撃を待つまでもなく、ほどなくしてパトカーは社長宅に到着した。

社長宅…
近代化し殆ど全てを機械化した最近の建築物とは対照に、まるで鹿鳴館のような迎賓館を住まいとして改良した洋館に、私と春樹は圧

倒された。
「わぁ、なんて素敵な建物かしらぁ。
舞踏会とか開催されたら、まるでベルばらの世界よねぇ。」
などと私が乙女チックな発言をしたのに、春樹は深い深い溜め息を吐いて冷たい視線を送ってきたかと思えば、やれやれ。と首を横に振った。
「ベルばらって歴史で習ったあの旧時代の漫画だよな？
お前いつから生きてるんだよ。」
春樹ったらわかってないわ。
「どんな時代のものでも名作って語り継がれるものじゃない？」
と反論したけど、春樹は興味なさげだったので、私もそれ以上は何も言わない事にした。
「しかし…、随分と時代に逆行した洋館だな。
こういう建築に拘る奴は、頭が固くて柔軟な発想が出来ない年寄りが多い。
こいつはどうやら、やっかいな仕事になりそうだ。」
はぁ。
この洋館の外観を一目見ただけで、よくそんなひねた見方が出来るものよねぇ。
と春樹を見ていたら、春樹は私の首根っこを掴んで強制的に自分から視線をそらせた。
「そんなに物欲しそうな顔で見つめるな。」
なぁんですってぇ？
と思ったけど春樹は確かに目の保養にはなる。
「良いじゃないの、減るもんじゃなし！」
といってやったら即答してきた。
「いや、減る！
というか、お前の場合は吸血の感染はないが、見つめられるとバカの感染があるかもしれん。」
むっかぁ！

春樹…、いつか殺す！
「で？
なんか言いたい事があるんだろ。
まさか本当に見惚れていた訳でもあるまい？
ただでさえお前は挙動不審なんだから、これ以上挙動不審な態度をとって俺を困らせるな。」
むぅぅ、本当の本当に春樹は可愛いくない！
「どうして洋館の外観を見ただけで、そんな決めつけるような事が言えるのよ。」
私の発言に、春樹は吐き捨てるように言って、それがまた私の気分を害させた。
「刑事のくせにプロファイリングも知らんバカにつける薬はないな。第一、あんな文面を書いた奴に好印象なんぞ持てるか？」
むぅぅ…、それは確かに。
「ぼさっとしてないで中に入るぞ。」
にしても失礼ね。
プロファイリングくらい私だって知ってるわよ！
と言い返してやりたかったが、春樹は私に構わずさっさと呼び鈴を押して玄関へと入っていったので、私も慌てて後を追った。
「ちょっと待ってよぉ。」
この洋館が殺人事件の舞台となるとも、その時は知らずに…。

第一章＜徹頭徹尾なるニヒル＞

川島宅…
そう、アブジーの上層部に直に依頼を要請したファイバー製薬社長の自宅…

玄関で私達を迎えてくれたのは、若くて美しいメイドさん達。
玄関の先は吹き抜けのロビーになっていて、そこから2階へと向かう螺旋階段がある。
さらに2階の天井から吊るされているのは、まるで本当にベルサイユ宮殿にありそうな荘厳華麗なシャンデリア。
中に入った私達は、まるで歌劇場にでも来たような錯覚を覚えた。
本当に映画のロケに使われてもおかしくないような外観に似つかわしい洋館内部である。
「あの…、刑事さん達？」
はっ！
あまりにも乙女心をくすぐる中世な洋館に感激していた私は、完全に心酔して浸っていた為、不意にかけられた家人の声で、一気に現実世界へと引き戻された。
「あら、嫌ですわ私とした事が。
どうか致しまして？」
などと、思わず雰囲気に従って不思議な言葉使いをしたら、春樹から刺すような冷たい視線と厳しい一言を賜った。
「あぁ。
こいつは俺の付録みたいなもんなんで、どうかお構いなく。
ちょっと浮世離れしていて頭のネジがずれているんですよ。
まともに相手をする程の奴じゃないんで。」
怒ってる怒ってる。
にしても…、しっつれいしちゃうわね！

そんな説明じゃまるで私が精神的破綻者みたいじゃないの。
と、私達のやり取りを見比べていたメイドさんが、仕切り直しとばかりに再度お辞儀をした。
「じゃあ、もう
さ一度御挨拶をさせて頂きますね。
私はここの洋館のメイド達を束ねている、中津　久美と申します。
御主人、川島　高次はお二人を応接間にお通ししてとの命を承っていますので、今からご案内をさせて頂きますね。」
メイドって時代錯誤な上、なんとも金持ちが好みそうな趣味よねぇ。
まぁ、実質は家政婦みたいなものでしょうけどね。
でも、久美さんって清楚で素直そうで従順って雰囲気だから、メイドという仕事をされていて不思議と違和感をおぼえる事はなかった。
まぁ、肩まで伸びた髪とカチューシャが愛らしい容姿と相まって、女性の私から見ても素敵って思っちゃうもの。

久美さんの案内に従ってロビーを進むと、玄関先で見えていた螺旋階段ががあり、ふと気付くと2階からは久美さんとは全く違う…ううん、ジャンル？趣？…ええと。
そう、対極！というくらい真逆な妖艶という言葉がぴったりの男性が喜びそうな肉体美を誇る、久美さんと同じ服装の［まぁ、同じメイドなら当然同じユニフォームよね］美女が、こちらを興味深く見つめているのが見えた。
先に久美さんを見てメイドという職業を認識してしまっているからか、2階の螺旋階段から現れた美女が不思議な存在に思えてしまったの。
なので私は小声で春樹に耳打ちしてみる事にした。
「春樹、なんか同じメイドさんでも久美さんとは全く違うタイプよね。
あぁいう美女って春樹のタイプ？」
すると春樹は深い溜め息とともに、いつもの怒鳴り声と違って皮肉

たっぷりに自慢？のニヒリストぶりを発揮した。
「ま、少なくともお前よりは遙かに魅惑的な女性だな。
お前も女なら、少しは見習ったらどうだ？
いつまでもスレンダーで誤魔化しきれるもんでもないだろ？
あぁスレンダーがわからないんじゃ皮肉にもならんな。
貧粗な肉体美とでも言っておこうか。」
カッチーン！
それって私が気にしてる胸が小さいって事を言いたいのね。
だってそれはしょうがないじゃない！
私ってば吸血鬼なんだし１６歳で体の成長が止まってるんだもの。
っとに可愛くない。
「まぁ私は肉体美よりも、この可愛い顔が自慢なんだもの。」
と言ってやろうと思ったのに、またしても春樹は先を越して無礼な事を言った。
「まぁ顔は絶望的なんだから、せめて肉体美くらいはどうにか出来るだろ？」
…。
ええい、この怒りをどうしてくれよう！
っとに腹立つなぁ。
「陽子さん…。
今日はお出掛けではなかったのですか？」
久美さんの問いに、２階の美女はなんとも艶やかな笑みをこぼし、
その問いには答えずに質問を質問で返してきた。
「あら、お客様かしら？
なかなか私好みの男を連れてらっしゃるじゃない。
あたし三村　陽子と言いますの、よろしくね。」
２階から見下ろしていた美女は聞いてもいない自己紹介を一方的にすると、螺旋階段を降りて春樹の顎を指で持ち上げ、春樹を挑発した。
が、春樹はそれをそっけなく振り払い、まるで何事もなかったかの

ようにつれない態度で接した。
「あら。
なかなかに手強い反応をするのね、つまんない男。」
すると春樹はすかさず、相手が妖艶な美女であろうとお構いなしの冷たく鋭い視線で返した。
「あぁ、失敬。
失礼ながら、俺は昔から娼婦のような見た目の下品な女には拒絶反応を持つ体質なんでね。
それに貴女からは下衆な香水の匂いがする。
楽しいですか？
そんな男に媚を売るような道化を演じて。」
あっちゃぁ～っ！
春樹の言葉に、さっきまで艶やかな笑みを浮かべていたメイドさん…、陽子さんは忽ち鬼のような形相で春樹を睨みつけると、洋館中にまで響き渡るかのような大きな音をする平手打ちを春樹に浴びせて、とっとと奥の間に去っていっちゃった。
「あの、ごめんなさい。」
何故か久美さんが慌てて謝り、それにこたえるように春樹が呟いた。
「だから失礼といったんだがなぁ…。」

第一章<不協和音>

あっきれた！
私は久美さんに悪くって思わず口を差し挟む事にした。
「春樹ぃ、ちょっと本当にいい加減にしなさいよ？
私にならともかく、勤務中にまで私と同じ態度や口調を女性にするんなら、刑事失格よ。
久美さん、こちらこそ本当に無礼な振る舞い失礼しました。」
で、私が取り繕うと久美さんも同じように会釈をし、対して春樹はというと、ばつの悪そうな顔をして頭を掻いていた。
あぁ、なんか久美さん好きだなぁ。
勤務中じゃなかったらお茶にでも誘いたい気分。
って私、人工血液しか飲めないんだけどね？
「先に無礼な態度をとってきたのは向こうの女だし、無礼を無礼で返して何が悪いんだ…。」
まぁったく！
春樹ったらまだあんな事を言ってる。
とか言いつつ、いつもと逆の立場である事に私は気をよくしていた。
「いやぁ。
庭先で見てたんやけど、なかなか面白かったで。
あのメイドの陽子さん、社長さんや奥様にはごっつぅええ顔しよるんや。
けど、なんや儂や久美さんにはえらい態度が悪い人なんだわ。
せやさかい、ちょっとすっとしたわ。」
と不意に声をかけられ中庭の方を見ると、庭先では庭仕事を終えた関西弁を話す初老の庭師の男性が、にこにこしながらこちらを見つめていた。
その瞳はなんともなつっこく優しげではあるが、上背があって恰幅

がよく［春樹と違って私は太っているなんて失礼な表現はしないからね？］、スキンヘッドの頭というサングラスしてたら怖い人にも見える、そんな印象の人が可愛らしく舌を見せて笑っていた。
「あぁ刑事さん。
この方は多田　光則さん。
多田さん、今から御主人様が待つ応接間へ刑事さんを案内しますので、また後ほど。」
と久美さんは笑いながら軽く会釈をすると、多田さんも笑顔で私達に手を振った。
中庭の庭園が見える螺旋階段を上がって洋館の２階を奥に進むと、奥には左右それぞれに扉があり、久美さんは右の扉を開けて、私達を手招きした。
「お待ち致しておりましたよ。
どうぞ、早くお入りなさい。」
あ、まぁた慇懃無礼な口調だぁ。
私はちょっと気分が害された。
扉が開くと同時にファイバー製薬社長、川島　高次氏が出迎えてくれた。
それにしても…。
社長っていうからどんなおじいさんかと思ってたけど、実物は意外と若かった。
歳はおそらく４０代前半？
整った顔立ちは少し日本人離れしてるからハーフなのかな？
昔の俳優…、うんジェームスディーンみたいで格好良い。
けど気難しくて偏屈らしい。
んー、春樹も気難しい感じだし、最近のイケメンって性格悪いのが多いのかしらん？
などと冷静に分析してみたりした。
中に入ると、これまたアンティークなソファー、アンティーク人形、

鹿の角の剥製などがあり、いかにも贅を尽くした数々の骨董品やロココ調の家具が煌びやかに配置され、川島　高次の成金ぶりが伺えた。
だが何より特に目を引いたのが、今にも襲いかかってきそうな、雄大だが、どこか狂気じみた威圧感のある三叉の鉾を手にした西洋の甲冑。
「凄い勇壮な鎧ねぇ。」
私は真っ先に、この甲冑を仰視していたのだけど、その私を見て気をよくしたのか、川島　高次さんは挨拶や依頼を後回しに、アンティーク談義を始めようとしていた。
「気になるかね？
なかなかの骨董品だろう。
それもそのはず。
なにせその甲冑は我が妻の子孫が代々守り続けてきた家宝であり、ギリシャ神話であまりにも有名な海神ポセイドンが装備していた、という伝説が残っている由緒ある鎧なのだよ。
因みにこちらのアンティークドールは世界でも類を見ない程の…。」
春樹は、このまま川島氏の自慢アンティーク談義に付き合わされるなんてまっぴらごめんだった為、熱弁を振るう川島氏の話を遮り、とっとと本題に入る事にした。
「先に自己紹介をさせて頂きます。
僕は藤田　春樹。
こちらは上条　美紅。
共にアブジーから派遣されてやって参りました。
早速ですが川島さん。
最近遭われているストーカー被害について、詳しくお聞きしたいのですが宜しいでしょうか？」
春樹のいきなりの強引な対応に、川島　高次氏は気を悪くした素振りをみせた。
が、一呼吸置いて冷静さを取り戻し、そして詳細を語り始めた。

お、大人な対応よねぇ。
このあたりが春樹とは大きく違う。
「まったく、そちらの刑事さんは短絡な直情径行の持ち主だな。
ま、いい。
アブジーである君達に来て貰っている事だし、早速本題に入ろう。
あれは数日前、私は帰宅途中に殺人現場を偶然目撃してしまったのだ。
いや、正しくは吸血鬼にとっての捕食…、といって差し支えないかな？
まぁ君達のうちのどちらかが吸血鬼刑事かはわからんが、気を悪くせんでくれたまえよ？」
つまり、吸血鬼の捕食殺人現場を見られた吸血鬼が、口封じの為に川島氏を殺そうとストーカーをしているって事かしら？
でも変よね。
それなら、もうとっくに川島氏は殺されていても可笑しくはないと思うの。
もしかして口封じが目的ではなく、威嚇？
吸血殺人の現場を見た事を黙殺させる為に川島氏をストーカーして威圧してるとか？
でも私が犯人なら、そんな不確かな真似なんてしない。
犯人は既に人を殺している訳だし、当然犯行現場を見られたら生かしておいたりなんてしないわ。
じゃあ他に目的が？
と思案中の私に構わず川島氏は話を続けた。

第一章＜逢魔が時＞

「私は帰宅してから慌てて棺桶で眠っていた妻を叩き起こし、助けてくれと懇願した。
そんな私を見た妻は、私が守ってあげるからといって邸宅を監視してくれていたのだが、家までストーカーしてくる吸血鬼の姿は、いつも発見出来ずにいた。」
つまり奥様は吸血鬼な訳なのね。
この時代、吸血鬼と人間が結婚するケースは実はそんな希有なものではなく、ヴァンピールの称号を貰った子供は人工血液に頼らなくても人間と同じものを食べて生きていけたりするから、生粋の吸血鬼の私にとっては非常に羨ましい人種だったりする。
「その後、私をストーカーしていた吸血鬼の正体がわかり、私はテレビを見ていて安堵していたのだが…。
あ、つまりだな。
先日、君がおとり捜査で逮捕した、伊東　雅人が私を付け回していた犯人だと断定出来たんでね。
奴の住処も、この邸宅のすぐ近くだったみたいだしな。
所が、だ！
奴が逮捕されてもなお、私は空からのストーカー被害を受け続けている。
殺人現場で目撃したのは間違いなく伊東　雅人だったのを鮮明に思い出して安心していたのに…。
奴はそんな私を再び恐怖に掻き立てよる。」
話を聞いていた春樹は、その川島の供述におかしな違和感を感じずにはいられなかった。
「おかしいな。
貴方は自分をストーキングしていたのは間違いなく伊東　雅人だと

テレビを見て鮮明に思い出して断定したと言ったが、それなら何故またストーキングしているのが同じ伊東　雅人だと？」
正論だと思う。
伊東　雅人は連続殺人犯として、今も吸血鬼専用の留置場にて拘束されているからだ。
「あぁ、今付け回している奴と伊東　雅人の服装が一致しているから、だが。
それに空から移る影も同じだし。」
あっけ。
そんな理由で同一犯による犯行だと断定しないで欲しいわよ、まったく。
「つまり伊東　雅人とよく似た容姿の吸血鬼が貴方をストーキングしているって事ね？
考えられる事としては、伊東　雅人には弟がいる。
だとすると、殺人現場を目撃した貴方が警察に出頭し、その為に兄が捕まったと思った弟が逆恨みで川島さんを狙っている？
でも、もしもそうならすぐにでも殺人行動に出なきゃおかしいわよね？
なんだか話が間尺に合わないわ。」
すると春樹がこれに口を挟んだ。
「弟は過去、なにも犯罪をおかしてはいない。
なら逡巡しているという線も考えられる。
なにより顔などの姿をはっきり見られた訳ではないのだしな。
ともかく、署に電話して弟をあらってもらうとしよう。」
私と春樹の話を聞いていたのか聞いていないのか、川島氏は突然半狂乱になった。
「そうだ。
きっとその弟が復讐をしようと私の命を狙っているんだ！
私はきっと殺される…。
殺されるんだぁーっ！

助けてくれ、金ならいくらでも出す！」
はぁ…。
まったくふざけた事を言う人ね。
私達は刑事であって貴方の用心棒じゃないっつーのよ！
第一、私みたいなレディーに言う？
と思いっきり言ってやりたかったが、不意に応接室の扉が開いたので、私は出鼻をくじかれた形となった。
「あなた、しっかりして？
あなたは私が守ってあげるって言ってるじゃないのぅ。」
辺りを見回すと、すでに日が沈みかけ、夕暮れになっていた。
「逢魔が時とは、よく言ったものだ。」
春樹ぃ。
こんな時に余計な事を言わないでよね！
昔は夕暮れ時を、魔物が出現する合図だと恐れ、夕暮れ時を逢魔が時と言ったの。
でもそれじゃ奥様に対する嫌みじゃない。
しかし奥様は春樹の失礼な一言には一切気にもとめず、恐怖にうずくまる川島氏を抱きすくめていた。
まぁ、なんだかあてられちゃった感があるけどね。
「あ…。
なにかいきなり御挨拶もせずにごめんなさいね？
私は川島　高次の家内、アマーリエ・ルグランジュ・川島です。
主人がまた発作的に取り乱していたものですから。」
と、アマーリエさんは申し訳なさげに私達を見て深々と、かつ、優雅にスカートの両裾をめくり、頭をさげた。
アマーリエさんって素敵な女性ねぇ。
美の女神、ヴィーナスと並んだって遜色ないって言っても言い過ぎじゃないと思う。
胸まで伸びた美しいブロンドの髪。
私にはない豊満な美乳。

均整のとれた北欧美人って感じかしら？
そして美しいエメラルドグリーンの瞳。
それに今の優雅な会釈。
なんだがまるで舞踏会の会場に来たみたいな錯覚さえ覚え、思わず真似しなきゃってスカートに手を伸ばした瞬間、春樹が小声で私に失礼極まりない気分をぶち壊す釘を指してきた。
「おい。
俺はお前の貧祖なスカートの中身なんざ見たくもない。
どうせお前に似合いやしないんだから、やめておけアホぅが！」
またまたカッチーン！
だぁぁれが春樹なんかにそんなサービスをするもんですか！
と頭にきた私は思わず春樹の革靴の先端を思いっきり踏んずけてやった。
「ったぁ～っ。
お前なぁ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1747ba/

吸血鬼犯罪捜査官　美紅

2012年1月10日23時46分発行